

巻頭言

人生には、決定的な出会いが何度か訪れる。

1969年7月、当時8才だった私は、アポロ11号の月着陸をほぼリアルタイムで見ていた。「アメリカのアポロ計画」という言葉が意識の中に飛び込んでくるようになったのは、1968年12月、アポロ8号が有人の月往復飛行に成功したときからであったと記憶している。この前後には、1971年火星大接近や1972年ジャコビニ流星群(マスコミの事前報道は大きかったが、結局大出現にはならなかった)などの天文イベントもあり、当時小学生だった私は、星や宇宙に大いに興味を持つようになった。ただし、これだけでは人生が大きく変わることはない。当時の多くの老若男女と同じように、自分も宇宙に興味を持った、という程度であった。その後中学生になり、高校を受験して、普通の高校生活を送っていた。

そんな私をぐっと宇宙に近づけたのは、高校2年生のときの学校行事であった。秋の文化行事の一環という位置づけだったと思う。東京天文台(現国立天文台)の古在由秀先生が高校に来て、ビックバン宇宙の話をしてくださった。これは私に非常に大きな衝撃を与えた。早速、講演会を聞いた晩に、小学生のとき買ってもらった望遠鏡を引っ張り出してきて星を眺めた。そして、その後、宇宙論や相対論に関する入門書を読み漁った。

大学受験では、理学部に進んで物理や天文を学ぶ方向を目指したが、一浪の末に合格できたのは第二希望の工学部であった。大学院進学の際には、当時注目を集めていたロボット工学の研究室を選んだ。そこで、恩師の梅谷陽二教授に出会い、これが大きな転換点となる。梅谷教授は、私に「宇宙ロボット」というテーマを与えてくださった。工学部に入学したことで、もう宇宙への関わりは切れたと思っていたところへ、一転して、工学者として宇宙ミッションに貢献するという道が開かれたのだ。

以来、「宇宙ロボット」にこだわり続けている。2003年打上げの「はやぶさ」の開発メンバーに加えていただき、サンプル採集方式の検討や探査機がタッチダウンする際のダイナミクスのシミュレーションを担当した。2005年のイトカワへのタッチダウンに際しては、データ解析を担当し、サイエンス誌掲載論文の共著者にも加えていただいた。これこそまさしく、工学者として宇宙探査ミッションに貢献するという夢が実現した瞬間だと、私は思っている。そして、2010年6月に地球に帰還したカプセルの中に、数多くの破片が入っており、それによってさらに太陽系科学の研究が進むことが、なによりうれしい。

少し遡って1998年より、縁あって、国際宇宙大学(ISU)の非常勤講師を務めている。ここは宇宙を目指す志の高い老若男女が、世界中から集まる場所だ。ISU創設者の一人、Peter Diamandis氏との出会いも、私の人生にとっての大きなマイルストーンになっている。いま、彼が企てるGoogle Lunar XPRIZEに挑戦する日本チームの、ローバー開発メンバーの代表を務めさせていただいている。

小学生の頃、白黒テレビで見た月からの中継映像。それから44年の月日がたったいま、自分を作るロボットが月の上を走り回る瞬間を夢見て、日々の研究開発に取り組んでいる。その日は、そう遠からずやってくる、と確信している。

吉田 和哉(東北大学)